

初級CST認定試験を振り返って

【松浦 匠：理学部】

CST審査会での模擬授業を通して、自分が行いたい理想の授業を15分間で伝えることの難しさを知った。実際の授業では、生徒たちが今までの授業の流れやプリント等の資料を見返すことによって、本授業の目的や意義を理解しやすくなっていったが、初めて本授業に触れる人にとっても分かりやすい授業とすることは重要であり、難しいことであると実感した。また、「仕事率」のイメージが教員と生徒で異なっており、電力換算した際の表現を「～回」とするか「～倍」とするかで伝わり方が変わることにも留意して授業を構成する必要があると感じた。審査会で頂いたコメントやアドバイスを参考に、生徒が主体となる授業デザイン力を身に付けていきたいと思った。また、CST講座を履修する上での様々な経験は、今後の自分の生活や考え方に生きてくるのではないかと感じた。

【審査員から】

- ・1時間の授業の学びを他の単元の学びとのつながりで関連付けて構想している視点がよい。
- ・教材として身近なものを取り上げる意欲はよいが、身近なものは複雑であり扱いが難しい。シンプルな材料でよかったのではないか。
- ・スライドを使いすぎると知識伝達が強く出る。
- ・子どもがどのような考えを持っているかを意識すると展開が工夫できる。

【川島 広：理学部】

CST審査会での模擬授業にて、貴重な体験をさせていただきありがとうございました。とてもタメになる機会だったと思います。反省は多く、模擬授業内で、生徒と共に考え授業を組み立てていくことが欠けていること、また理解力の高い子たちのクラスでは適切ではないこと、など審査員の方々からの指摘に深く考えさせられました。また他の学生の模擬授業も面白く新鮮で、自分だったらどう教えるのかなどと考え、ただただ感心していました。特に生物分野や地学分野は高校で受講してなかったため、そうやって教えるんだなと勉強になりました。みんなすごいなあと思いつつ、自分と比較して聞いていましたが、審査会后、参加者と少し話した時に私自身の教え方などを褒めてもらい、嬉しい気持ちになりました。私は一度一般企業に入りその後教員になるうと考えていますが、この模擬授業の経験をその時にしっかり活かせるようこれからも学んでいこうと思います。

【審査員から】

- ・教える内容が簡単と思える事柄についても、モノを教室に持ち込み事象を見せようとする心構えがよい。
- ・生徒の持つ仮説や考えについて、教師が答えようとせず生徒同士の対話や観察実験に答えを求めようとする姿勢をさらに大切にしたい。
- ・事象をしっかり見せる、しっかり比較させることを大切にしている。
- ・「教える」⇒子どもが「考える」に変えていきたい。

【鈴木 未希：理学部】

審査員の方々の質疑を通して、生徒へのフォローが足りない授業になってしまったと感じました。模擬授業では実際に行った授業を使用したのですが、解説に時間をかけない授業の進め方を意識しました。その理由は生徒観として議論を活発に行うことができることと、教師が話している時間は生徒の思考を停止させる時間にもなるという考えからです。しかしこのような進め方に対して「置いて行かれる生徒がいるのではないか」「生徒が焦ってしまうのではないか」という意見をいただきました。確かに教員、思考の開始が少しゆっくりな生徒や、聞いたことを整理するのに時間のかかる生徒もおり、そのフォローは足りなかったかもしれません。大勢が楽しく集中力を切らさせない授業展開を意識しスピード感を重視することと、少しゆっくりな生徒へのフォローを両立させることは難しく、しかし重要な点であると強く感じました。

【審査員から】

- ・個別に実験を行うことで一人ひとりが探究者になり一人ひとりが発見することへの喜びを味わえるという点で考え方はよい。
- ・「どんなきまりがあるか」という課題性を持たせて個別実験を設定するよさを生かす展開を描けばなおよかった。
- ・教材に工夫があり比較して考えるものになっていた。
- ・導入の仕方によって条件自体を子どもが考えることは可能、どこを考えさせるか検討したい。

【鈴木 海都：農学部】

今回のCST審査会の反省として、一番大きくあげられることは目の前にいる生徒（役）が、私が実際に担当した生徒とは大きくかけ離れていて予想される反応について考えることがかなわなかった点だと考える。私の担当した学級は中学1年生だったため、どの生徒も活発的に、間違っているかもしれないという考え無しに答えを言ってくれていた。授業概要を伝える所は比較的うまくいったのではと考えてはいるが、今回の模擬授業はそういったところで少し動揺してしまった為、自分が行おうと考えている授業の100%が見せられなかったなど感じる。後半の発表者の中に、生徒はこういう反応をしますなどと言ってそのまま授業を進めていたので私の考えが単純に足りなかったのかなと思う。しかし、今回のCST審査会ではとても多くの、自分が考えもつかなかった授業にあふれており、とても有意義であった。実際に自分が教員になった後、彼らともう一度会えたらとてもうれしい。

【審査員から】

- ・状態変化とのつながりということがきちんとつながった授業の運びであった
- ・モデルで思考することの意味やよさについてきちんと考えを持っている。
- ・正しいと思われることを考えるのではなく発見する、考えを作り出すということを大切にしてもらいたい。
- ・単元間のつながりをとらえて展開している。生徒が粒子のモデルを活用して考えていける実験になっていた。
- ・モデルを考えるところで、複数の考えを比較し合う場面があるとよい。

【吉池 葵：農学部】

概ね予定通りの授業はできましたが、緊張すると言葉が震え、うまく口が回らなくなる、緩急や強弱がうまくつけられなくなるといった点はなかなか直らないので意識をし続けたいと感じました。

他の先生方からお言葉を頂き改めて考えたのはその授業で何を生徒たちに残したいかということです。「その授業を考えた理由は？」や「他の学習問題を考えなかった？」「最終的にどんな回答を求めているの？」全てその点を突き詰めるための質問だったと思います。この授業を組み込んだ目的は発表会後も変わりませんが、その目標に到達するまでの道筋。とりわけ学習問題、課題の掘り方や最終的な結論のモデルなどは熟考する必要があると改めて学ぶことができました。授業を作るということはあるものの一部分を切り取り、理解のきっかけにする物だと感じました。生徒たちとの対話の中でさまざまな切り口に対応できるよう分野への根本的な理解も大切にしたいです。

【審査員から】

- ・状態変化とのつながりということがきちんとつながった授業の運びであった
- ・モデルで思考することの意味やよさについてきちんと考えを持っている。
- ・正しいと思われることを考えるのではなく発見する、考えを作り出すということを大切にしてもらいたい。
- ・単元間のつながりをとらえて展開している。生徒が粒子のモデルを活用して考えていける実験になっていた。
- ・モデルを考えると、複数の考えを比較し合う場面があるとよい。

【堀 礼人：農学部】

模擬授業では初めに全体の流れを話し、その後、実際に冒頭から授業を行った。全体の概説では自分の行った教育実習での話はしなかったのが背景が弱かったと考えられる。授業では、想定よりも導入で時間を使ってしまったので、ほぼ復習の場面で模擬授業を終えてしまった。また、指導案の時間通りにはならなかった。そのため、グループワークの実演を行うことは出来なかったのが、何を伝えたいのか分からないモノになったと考えられる。

【審査員から】

- ・状態変化とのつながりということがきちんとつながった授業の運びであった
- ・モデルで思考することの意味やよさについてきちんと考えを持っている。
- ・正しいと思われることを考えるのではなく発見する、考えを作り出すということを大切にしてもらいたい。
- ・単元間のつながりをとらえて展開している。生徒が粒子のモデルを活用して考えていける実験になっていた。
- ・モデルを考えると、複数の考えを比較し合う場面があるとよい。

【西村 奈津：繊維学部】

研究授業の時よりも緊張しました。自分が思っていたよりも時間が過ぎるのが早かったです。私の実習先では導入の部分に時間を多くかけていたのですが、CST修了講座で15分という短さではなかなか時間がさげなかったです。実際に皆さんに実験を見てもらい予想してもらいたかったのが導入を大幅に削りました。しかし、教育実習中では導入に時間をかけていたため上手な削り方が分からず慌ててしまい結局時間をかけて考えたところを削ってしまいました。1回でも削ったバージョンでリハーサルをしてから授業に臨めばよかったです。実際の本番よりも、生徒観やその場の雰囲気分からないまま授業するのは少し怖かったです。教育実習中の方が、3週間弱交流してきた生徒たちと指導教官の先生でアットホームな感じてました。また、私は教育実習事後演習にほとんど参加できなかったためフィードバックを個人でしておくべきだったなと感じました。

【審査員から】

- ・実験の見通しを生徒が持てるようにするため、うまく子どもたちから考えや前向きな行動を引き出せていた。
- ・レベルが少し高い話だが、何を引き出し何を教えるか、その軽重をもてるとさらによい。
- ・子どもの思考判断表現の力を育成する意図が見えた。

【三池 杏実：繊維学部】

審査員の方からの「その活動の必要性は」という言葉が強く印象に残っている。研究授業は担当教諭以外の教諭が見学に来るという点から他の授業実習よりも見栄えのする授業構成であることが望まれることがあり、少なくとも私の場合では指導教諭に何についての実験がしたいのかまず尋ねられた。模擬授業でも幾多の活動を見ることができた。しかし、活動をなぜ取り入れなくてはならないのか、ということまでは考えていなかった。活動のみならず授業プリントにおいても用語を書き込ませて終わりにするのか、モデル図を描かせるのかなど、構成は多岐にわたる。考え始めると終わりがなくなるためにいつの間にか考えないようにしていたそれでないといけない理由というのを今一度考えてみるのもいいのかもしれない。

【審査員から】

- ・動物の目の解剖を扱う意味をもち教材研究に取り組んだ良さが光る。
- ・予想の時間が確保され観察の観点が明らかとなり、見通しをもって学ぶことができる。
- ・しくみかつくりか、ねらいを明確にできるとよい。

【大西 規裕さん：繊維学部】

授業全体の構成を説明した後、実際にやってみたときに問題点として挙げられた点と改善点を説明しようとしたが、展開が多かったため伝わりづらかった。先に板書を書いておくことやそのデータを写真として保存しておくことで時間に無駄なく進んできたのではないと思う。また、伝えたいことが多数ある中でも自分が焦点を置いた部分のみを話しても良かった。実際、喋る早さを指摘されたが、それを予防するためにも余裕を持った計画を立てるべきであった。内容を伝えるにあたって、実際の様子を見ていないと細かな授業の流れは相手方には伝わりにくい。まして、今回のように実験がないことに加え、オリジナルで問題を作成してみるとなおさらわかりづらくなる。今後、同様の機会があれば以上のことを注意して臨んでいきたいと思う。

【審査員から】

- ・実験の見通しを生徒が持てるようにするため、うまく子どもたちから考えや前向きな行動を引き出せていた。
- ・レベルが少し高い話だが、何を引き出し何を教えるか、その軽重をもてるとさらによい。
- ・子どもの思考判断表現の力を育成する意図が見えた。